

「花火」の描画手法にみる事象の知覚と表現

絵画の表現技法の言語記述と分類に関する予備的検討

○鈴木清重

(東の森映画製作所・慶應義塾大学法学部, 商学部)

キーワード: 知覚と表現、事象知覚、視覚的表現と言語行動

Event perception and expression in the drawing technique of "fireworks".

Kiyoshige SUZUKI

(Higashinomori Film Studio, Keio University)

Key Words: perception and expression, event perception, visual expression and verbal behavior

目 的

花火の絵画は、花火の知覚の様態を検討可能にすると考えられる(増田・鈴木・増田, 2006; 鈴木・増田, 2008)。増田ら(2006)は美術系の学生に「花火の描画」を求める予備調査を実施し、120枚の絵画作品を花火の知覚内容に基づき4種類(平面:51、立体:99、抽象:23、事象:11枚、重複:64)に分類した。分類結果は調査対象者の「花火」の画が調査対象者の日常的な花火(爆発物)の知覚を反映する可能性を示唆した。絵画の内容と描画手法は、爆発物の知覚に限らず私たちの日常的な事象知覚の様態を反映する可能性がある。

予備調査(増田・鈴木・増田, 2006 他)には、知覚内容の検討材料となるカテゴリごとの絵画作品の特徴が一意に確定しない問題があった。1枚の画が複数の描画手法と知覚内容を含み、作品の分類に重複があったためである。鈴木(2017)は、分類カテゴリと作品を一意に対応させる手続きで新しい分類基準を作成した。予備調査データの分類を追試した結果、予備調査と同様の分類(平面、立体、印象、事象)が可能であった。各分類名に該当する作品の典型例に変更はなく、予備調査と追試の結果の一致率は76%であった。しかし、鈴木(2017)の分類基準を用いた2名の分類者による追試結果の一致率は27%であり、分類基準の信頼性に問題が残った。

本研究の目的は、1) 鈴木(2017)が作成した絵画の分類基準を改良することである。異なる分類者間で一致率が高く、信頼性の高い分類基準を検討する。視覚的表現を言語によりカテゴリ分類する上での問題点を検討し、2) 新しい分類基準により、予備調査の結果を再検討する。

方 法

調査対象 デザイン、美術の専門学校と大学へ通う18歳から25歳の男性3名、女性117名であった(平均18.7歳、±標準偏差1.1、以下同じ)。美術教育を受けた年数は平均4.0±3.0年であり、最頻値は6年であった。1年に花火を見る回数は平均2.3±3.3回であり、最頻値は1回だった。

材料 描画用に、B5版のコピー用紙を用いた。調査対象者が普段学校へ持参し使用する筆記用具、画材を自由に使用するよう求めた。

手続き 2006年5月に都内で3回に分けて実施した。デザイン、美術系の専門学校および大学の3つの講義の冒頭で用紙を配布した。以下の教示を板書と口頭で与えた「花火の画を描いてください。10分間」。所要時間は、15~20分だった。

結果の処理 映像制作経験のある46歳の男性1名が調査対象者の絵画作品を観察し、鈴木(2017)に基づくカテゴリに分類した(分類A)。分類に際して分類基準を作成した。完成した分類基準を用いて、デザインの専門教育を受けた29歳の女性1名が分類作業を行った(分類B)。2つの分類結果の一致率を算出し、絵画表現のカテゴリ分類基準の問題点を検討した。

結 果

分類Aにより新しい分類基準を作成した。分類Aの結果、120枚の絵画作品を鈴木(2017)と同様の4種に分類(平面:9、立体:63、印象:33、事象:15枚、重複なし)できた。予備調査(増田・鈴木・増田, 2006; 鈴木・増田, 2008)および鈴木(2017)が各分類の典型例と考えた作品の分類結果に変更はなかった。予備調査との一致率は79%であった。分類Bの結果、分類Aと同様の4種に分類(平面:11、立体:73、印象:17、事象:19枚、重複なし)できた。典型例の分類結果は予備調査から変更がなく、予備調査との一致率は76%であった。分類Aと分類Bの一致数は、平面:3、立体:49、印象:13、事象:10枚であり、合計75枚が一致した(一致率64%)。予備調査から全ての分類結果を通じて典型例4枚(鈴木・増田, 2008 他)の分類結果の一致率は100%だった。

考 察

予備調査との一致率より新しい分類基準は妥当だったと考えられるが、分類A、B間の一致率より信頼性に問題があった。平面と立体の表現を弁別する難しさと個人差が要因の1つと考えられる。画像と言語行動の対応を検討する必要がある。

描画手法と事象知覚の関係を考察した。「平面」の描画手法の典型例は花火を平面(円、丸)の火花の配置として描く特徴をもち、地上からの爆発物の知覚経験を反映したと推測できる。「立体」の描画手法の典型例は花火を立体(球体)の火花の配置として描く特徴をもち、TV中継(空撮)による爆発物の知覚経験を反映したと推測できる。「印象」の描画手法の典型例は爆発の印象もしくは爆発事象に接近した様子を描く特徴をもち、花火の局所的部分の凝視する知覚経験を反映したか、爆発の印象を反映したと推測できる。「事象」の描画手法の典型例は、「爆発後の煙が漂う空」を描く特徴をもち、花火を鑑賞した直後の風景を描いたと推測できた。制作者自身の言語報告より、毎年花火大会を鑑賞した直後に観察する風景を描いたとのことであった。モノとしての花火を描かず、「花火の体験」を描き花火を表現する手法は、動画像編集などの視覚表現に共通する技法と考えられる。みかけの画像系列に非感性的完結化を生じさせる技法と考えられる。

引用文献

- 増田 知尋・鈴木 清重・増田 直衛(2006). 打ち上げ花火はどう見える?—拡大運動の知覚— 日本アニメーション学会第8回大会 沖縄県立芸術大学
- 鈴木 清重・増田 知尋(2008). 外界の「うごき」にみるアニメーション—表現と認識— 村上 和夫・長田 佳久・河東田 博(編) たのしみを解剖する:アニメーションの基礎理論(pp. 30-59) 現代書館
- 鈴木 清重(2017). 「花火」の描画手法に関する実証的研究 日本基礎心理学会第36回大会 立命館大学